中学校社会科歴史的分野における授業のあり方

―平安時代の実践を通して―

砂田雅志・小原友行*・木村博一**

The Ideal Way to Classes of Heian Era

Masashi SUNADA, Tomoyuki KOBARA, and Hirokazu KIMURA

Abstract. The present study purposed that develop of new teaching materials to Heian Era, clear the ideal way to evaluation for unity of practice and evaluation.To accomplish this purpose, I practiced the classes. The result of this study that new teaching materials developed to Heian Era . But there is a task. And the result shows that there is task for evaluation.

Key words: new teaching materials , classes of Heian Era , unity of practice and evaluation

Ⅰ．はじめに

本年度より新指導要領が実施され，これからの社会を生き抜いていく生徒の育成をめざした取り組みが求められている。社会科歴史的分野においても，これまでの授業のあり方の改善が急務になっている。それは，これまでと違って必修の時間が減少したからである。特に歴史的分野においては，内容がこれまでの時間数でも２年生までに終了しないということが多々見られることからもいえる。また，学力低下が問われている昨今，時間数の減少に対して，これからの社会を生き抜いていくための「生きる力」を育成するために，社会科としてどのような力を育成していけばいいのかを明確にしなければならない。同時に「生きる力」がどのような指導の結果，どれだけ育成されたのかを明確にすることが求められている。このような状況の中で，指導と評価の一体化をめざした評価活動を行い，評価を生徒・学習者ともに価値あるものにすることが大切であると考える。ここでは，歴史的分野における指導とその評価のあり方について実践を通して迫ってみたい。具体的には，社会科における育成すべき力の明確化，平安時代の単元構成とその実践，その取り組みに対する評価と生徒に対する評価について考察していきたい。

*広島大学大学院教育学研究科教授

**広島大学大学院教育学研究科助教授

Ⅱ．社会科で育てる力

生徒にどのような力をつけるのかというねらいをしっかりもっていなければ，授業は成立しない。

中央教育審議会の第１次答申では「生きる力」の１つとして，自分で課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決する資質や能力をあげている。本校でも，めざすべき人間像を明確にし，そのための基礎・基本として３つの力の育成を挙げ取り組みを進めている（黒瀬ほか2002)。また，社会科においてもどのような力を育てるべきかについても検討を行い授業の改善を行ってきた（砂田2002)。その結果として以下のように整理した。

1　社会科で育成する５つの力

社会科の授業実践を行う上で，まず社会科でどのような力を育成するのかを明らかにした。

(1)　問題発見力　社会の急速な変化や課題に対して，具体的な活動や体験を通して知的な問題や実践的な問題を発見する力（「なぜ」「どうして」を見つける認識興味や知的好奇心）

(2)　情報活用能力（コミュニケーション能力）
問題を解決するために必要な情報を受信する力（調べる方法や資料活用能力）と情報を発信する力（調べたことをまとめ発信する表現力）

(3)　探求力（探究力）
知的な問題「なぜ，どうして」を解決していくことができる力（思考力）

(4)　意思決定力　実践的な問題「どうしたらよいか，どの解決策がより望ましいのか」を解決していくことができる力（判断力）

(5)　受容力　自分とは違った考え方をきちんと受けとめ，それに対応する力（聞く力・合意を形成する力）

2　社会科で育成する力と本校の３つの力との関連

社会科で育成する５つの力と本校がめざすべき人間像の基礎・基本と考えた３つの力との関連を明確にした。本校がめざすべき人間像の基礎・基本と考えた３つの力は，「多元的価値観を受容する力」「表現・コミュニケーション力」「意思決定力」である。

この３つの力の定義は次の通りである。

○多元的価値観を受容する力
自分の良さを大切にし，お互いの違いを違いとして認めながら共に高めあう力

○表現・コミュニケーション力
情報や意思，思想，態度などを共有するために必要な情報を正しく受けとめる力，自分の考えを主体的に表現する力

○意思決定力
個人や集団が直面する問題に対してよりよく判断し解決するために，いくつかの合理的解決手段案を考え，選択・決定する力

(1) 探求力（探究力）・受容力

自ら学ぶ（探究する）という中でいろいろな考え方を知り，その考えを理解し認めていく力を育成することで，多元的価値観を受容する力を育成することにつながると考える。

(2) 情報活用能力

資料や情報を見つけたり選択したり読みとったり，自分で探究したことをまとめたり，まとめたことを発表したりすることで，表現・コミュニケーション力を育成することにつながると考える。

(3) 意思決定力・受容力

いろいろな資料や情報，他の人の意見や考えを認めた上で，考察したり判断したりするというで，3つの力の意思決定力を育成することにつながると考える。

この関連性を表したのが表2である。

表1　本校の3つの力と社会科の5つの力との関連

	多元的価値観を受容する力	表現・コミュニケーション力	意思決定力
問題発見力	○	○	○
情報活用能力	○	◎	○
探求力(探究力)	◎	○	○
意思決定力	○	○	◎
受容力	◎	○	◎

◎…特に関わりが強いと考えられるもの

○…関わりが強いと考えられるもの

Ⅲ．授業づくり

1　単元設定について

歴史的分野の授業を行う場合，その時代の特色を示している代表的な歴史的事象を中心に単元を構成することを心がけてきた。これまでの実践の中で取り上げてきた中心的な歴史的事象は，墾田永年私財法，元寇，検地・刀狩り，開国などである。そしてこれらの歴史的事象における因果関係をつかませることを授業のねらいとしてきた。今回，平安時代を取り上げたのは，貴族の時代であり，武士が成長する時代でもあるこの時代を大きな流れの中でその時代の特色をとらえさせたいと考えたからである。

平安時代のとらえ方として，指導要領における単元構成は次の通りである。

大項目…古代までの日本

ねらい…日本列島において人々の生活が始まり，やがて国家が形成されて天皇や貴族の政治が展開していったあらましを東アジアとのかかわりに気付かせながら学習させる

中項目…天皇・貴族中心の国家の形成

ねらい…大陸の文物や制度を積極的に取り入れながら国家の仕組みが整えられ，その後，天皇・貴族の政治が展開されたことを，聖徳太子の政治と大化の改新，律令国家の確立，摂関政治を通して理解させる。

このとらえ方で単元を構成して授業を行うと，歴史的分野のねらいの一つである「歴史を大きな流れで理解させ，各時代の特色を理解させる。」の各時代の特色についてはよく理解できるが，大きな流れという視点ではとらえにくいのではないかと感じてきた。飛鳥時代は豪族の時代，奈良時代は天皇の時代，平安時代は貴族の時代，鎌倉時代は武士の時代のように，その社会を代表的な身分で表し，政治の仕方・経済のしくみなどを学習することでその時代の特色は理解しやすいと考える。飛鳥・奈良といった律令制を完成させることを目的としていた時代，また，鎌倉・室町・安土桃山・江戸といった封建制の社会であれば，時代の特色と大きな流れといった視点でとらえられると考える。しかし，このとらえ方で平安時代をみると，鎌倉幕府が成立したとき武士が急に出てきて，貴族を倒し幕府をつくって日本の政治を天皇・貴族に代わって行うことになり，革命のように急に社会が変革したととらえてしまいがちになり，「歴史を大きな流れ」で理解させることが難しいのではないかと考えた。平安時代のような貴族と武士という政治の仕方や経済的基盤の全く違う２つの勢力が，お互いの力を利用したり敵対しあったりしながら展開していく時代のとらえ方は，律令制の変容（貴族）に視点をあてるのではなく，そのように変容させていった封建制を基盤にした武士に視点をあてる方が，歴史を大きな流れで理解させることができると考えた。

そこで，平安時代を，武士が次第に成長し，貴族に利用されながらも自分の地位の向上をめざして貴族とせめぎ合いを行い，貴族の政権維持に必要な存在になり，しだいに貴族を圧倒し自らが政権を握るまでに成長する時代であるととらえることにした。そして，その過程で貴族が政治の中心に位置していたとき（きれいに着飾った女性たちが活躍する平安絵巻など）があったことを学習することにした。このように，武士の成長に視点をあてることで平安時代をダイナミックにとらえるこようと考え，表３のように中項目を設定し単元を構成した。

表２　中項目の違い

大項目	指導要領が設定した中項目	新しく設定した中項目
古代までの日本	・文明のおこりと日本の成り立ち ・古代国家の歩みと東アジア世界 **・古代国家の完成** **・国際的な文化の開花と国風文化**	・文明のおこりと日本の成り立ち ・古代国家の歩みと東アジア世界 **・古代国家の完成と国際的な文化の開花** **・武士の成長と貴族の社会，文化**
中世の日本	・武家政権の成立と展開 ・中世の社会の変化と文化の特色	・武家政権の成立と展開 ・中世の社会の変化と文化の特色

2　この中項目（単元）の指導目標について

この単元のねらいは，貴族ではなく武士に視点をおいた指導を行うことである。しかし，武士が成長する過程で貴族の存在は欠かすことができないものである。武士の成長に貴族がどのように関係していたのかを明らかにすることも大切なことであると考え，次のような指導目標を考えた。

1．武士が誕生し，貴族との関係でどのように力をつけていったかに関心をもたせ，意欲的に課題を見つけ，追究させる。
2．資料から武士が誕生し，武士の支配がしだいに全国に広まり，武家社会が発展していったことを貴族との関係に注意しながら考察させる。
3．立場の違う資料を読む中で，考え方の違いや思いを読みとらせる。
4．武士が誕生し，武士の支配がしだいに全国に広まり，武家社会が発展していったという大きな時代の流れを，貴族との関係に注意しながら，節目となる歴史的事象を通して理解させる。

3　指導計画について

次に，武士の成長に視点をあてた歴史的事象を組み合わせて単元の指導計画を作成した。歴史的事象として取り上げた主な事象と取り上げた理由は次の通りである。

承平・天慶の乱（平将門・藤原純友）

武士という存在が乱という形で表立って表れ，その乱を貴族ではなく，官位・官職をつかって武士に鎮めさせた。また，この乱の結果，中央の貴族へ荘園の寄進が相次ぎ，貴族の絶頂期を迎えるきっかけとなった。

前九年・後三年の役

奥州の安部氏・清原氏の一族の争いに対して，源義家が介入してこの内紛を収めたが，中央貴族は私的な戦いだから恩賞を与えなかった。この措置に対して，源義家が自分の土地を配下の武士に与えることで武士の棟梁という存在が生まれた。武士間でのご恩と奉公の関係ができあがり，武士団として貴族と対抗できる勢力をもった。

院政

天皇家・摂関家の内紛に武士団の力が大きく関わり，武士団の力関係で争いが決着するようになり，武士の棟梁が貴族の最高位につくまでに成長した。

鎌倉幕府の成立

武士が，征夷大将軍として武士の最高位を得て幕府を開き，日本全国の警察権をもち，武士のしての政治を始めた。

これらの事象を構成し，次のように指導計画を構成した。なお，ここでは鎌倉時代までの指導計画を表す。

(1)　武士の登場 …… 4時間

1）墾田永年私財法と荘園　　1時間

2）承平・天慶の乱と王朝国家の形成　　2時間

3）王朝国家の完成　　1時間

(2)　武士の成長 …… 2時間

4）前九年・後三年の役と武士の棟梁　　1時間

5）院政と平清盛　　1時間

(3)　武家政権の誕生 …… 5時間

6）鎌倉幕府と承久の乱　　1時間

7）鎌倉文化（宗教）　　1時間

8）元寇　　2時間

9）鎌倉幕府の滅亡と主従関係の変化　　1時間

また，この授業で育成すべき力を明確にすること，力がついたかどうかを判断するための視点を明確にするため，1時間の授業が終わるごとに次の授業についての4つの観点ごとに細かな計画を立てて授業を行うことにした（資料1）。

4　授業構成について

授業を構成するにあたって，生徒自らが考え探究するという過程，いわゆる生徒の主体的な学習を大切にした。下にある指導案は，今年度の研究会で公開した授業のものである。なお，指導案は中単元を想定した内容となっている。

社会科学習指導案

年　　組　第1学年1組　40名（男子20名，女子20名）

日　　時　平成14年11月22日（金）　第1校時（9：20～10:10）

場　　所　第1学年1組教室

単　　元　武士の成長と武家政権の誕生

単元設定の理由　この単元の指導内容は，墾田永年私財の法から戦国時代までである。この時代は武士が生まれ，成長し，政権を担うようになってくる時代である。これまでは，大きく分けて貴族の政治の仕方，鎌倉時代の武家政権，室町時代の武家政権といった指導が主で，政治の主導権は誰が握っていたか，政治の仕組みはどうなっているかという点に注目して指導されてきた。それは古代の律令制の要素や中世の要素が入り交じっていて，詳しく指導しようとするとかえってわかりにくくなってしまい，わかりやすくするために政治の動きを中心に指導してきたと考えられる。しかし，この構成の仕方では，1時間の授業の中で生徒に因果関係について考えさせることはできても，大きな流れの中で，その時代の特色を把握したり武士の成長についての因果関係を考えたりすることはできにくい。結果的に生徒にとっては，政治の移

り変わりを知識として覚えさせることのみになっていたのではないかと考える。従って平安時代を貴族の時代ではあるが，武士が誕生し成長していく時代ととらえ，それと関連させる中で貴族や天皇を扱うことは，歴史の大きな流れの中で事象をとらえていくという観点から重要なことだと考える。また，武士が誕生し成長していく過程がよくわかる歴史的事象を中心に取り上げて，そこに生きた人の思いなどを考えることで，複雑になりやすい事柄をできるだけわかりやすく指導することが可能であると考える。

本学級の生徒は，これまでの学習の中で，「なぜ？」という言葉を出し始めてきた。それは，ただ聞いているだけでなく，自分から学習しようとする姿勢がついてきたことの表れではないかと考えている。また，資料の選択の仕方についても，素早く適切なものを見つけようとする力も付けてきている。しかし，史料の読みとりに関しては，難しい言い回しや意味がわかりにくいものが多いため，なかなか受け入れにくいものがあるように感じられる。授業における積極性の減退がすこしみられることもそのことに原因があると考えられる。

そこで，単元を通しての課題を明確にすると同時に，1時間ごとの学習課題を生徒が設定できるような授業構成を考えさせることで，意欲的な学習活動ができるように仕組んでいきたい。また，教師が提示した史料の読み取りをきちんとさせたり，そこに生きた人物の気持ちや思いを考えさせたりすることで，歴史的事象やそれらの因果関係をとらえさせたりしたい。また，そうした1時間の授業の中で必要なことを知識の基礎・基本を押さえていきたいと考える。

本時の目標　平将門・藤原純友の2人の生き方を通して武士の誕生について考察し，この事象が王朝国家の形成に大きなはたらきをしたことを理解させる。

本時の研究意図　歴史を大きな流れの中でみる武士の誕生という授業構成と，社会科としての力を育てるための評価のあり方について考える。

準備物　ワークシート　史料プリント

学習指導過程

学習過程	学習活動	指導上の留意点
1．導入	○平将門と藤原純友について前時にわかったことを確認する。	○意欲的に発表しようとする気持ちにさせる。
2．展開 1	○将門と純友が朝廷に反乱するようになった理由を考える。 ・将門…在地の紛争調停をするうちに謀反人になった。	○前期の復習の中から小さい課題を設定し，追究させる。 ○この当時の武士についてのイメージをもたせる。

	・純友…受領との対立による自分たちの権利を守る，体制内の地位向上。	○自分の考えをノートにまとめさせる。 ◈考えたことを書いているか。 ◈学級全体として課題を追究しようとしているか。(行動観察)
3．展　開　2	○将門・純友に見る武士 の願いと，武士を使って乱を鎮めた貴族の武士の見方について考える。 ・武士…もっと上の官職を手に入れる。 ・貴族…国家的軍隊をもたない朝廷が官職をえさに地方の武士を使う	○朝廷の乱後の恩賞から考えさせる ◈学級全体として課題を追究しようとしているか。(行動観察) ○自分の考えをワークシートに書かせる。
	○官職の必要性について説明する。	◈考えたことを書いているか。
4．展　開　3	○政治の主導権を握っていたのは貴族であることを知る。	○小学校で習っているので簡単に説明する。
5．まとめ	○次時の予告	

◈は評価の視点

5　評価について

以下の点について評価してみたい。

・平安時代を武士の成長する時代ととらえたとらえ方と単元の設定の仕方が「大きな流れと各時代の特色を理解する」というねらいを達成するものであったか。

・本時の授業における指導過程が生徒自らが探究する過程になっていたか。

・生徒の評価をいかに行うか。

Ⅳ．考察

1　大きな流れと各時代の特色の理解について

本授業のねらいの１つは，武士が革命的に急に出てきて貴族の社会を倒したという社会の変化ではなく，武士と貴族がお互いを利用しながら，武士がしだいに貴族に取って代わっていくという変化の理解をすることである。この点については，この時代の学習が終了したあとの総括的評価として設定したポートフォリオ（資料２）において，武士と貴族の２つの勢力の動向についての視点を与えておくだけで，平安時代は武士が成長する時代であり，その中で貴族をとらえるという形でうまくまとめていた。摂関政治を承平・天慶の乱後に設定したことや，時代を通して武士と貴族の関係に注目させたことがこの理解につながったと考えられる。１年生の歴史学習を始めてそれほど時間がたっていな

いということから考えると大きな成果としてあげられるのではないかと考えている。また，研究会後の分科会において，本時の「平将門・藤原純友」は，教科書への記述が少ないなど取り扱うには難しい面があるが，生徒の能力とかけ離れないように注意しながら授業を行えば良質でおもしろい学習材であったとの指摘を受けることもできた。

しかし，平安時代をどのようにとらえるかという面において，次のような指摘を受けた。1点目は，武士の誕生と王朝国家の形成という大きな流れの理解をさせようとしているが本当に達成できたものになっていたか。つまり，「どうして武士は誕生したのか」についてしっかりと探究する過程を組んでいなかったのではないか。王朝国家の形成と関連づけさせてさらに問いかけや説明が必要であったということである。2点目は，その基となる王朝国家の概念のとらえ方が不十分ではないかということである。このことに関しては，平安時代について武士の成長を中心に単元を構成することのみを考えており，武士と貴族の関係が明確になったことだけで単元を構成してしまったことで，その基になる王朝国家のとらえ方を曖昧にしてしまっていたことが原因ではないかと考えており，再検討が必要であろうと考えている。

2　生徒自らが探究する指導過程について

指導課程における学習課題である，「なぜ朝廷にアピールするはずの立場にあった人物が反乱を起こしたのか？」というとらえ方は良かったとのではないかと考えている。ただ，生徒からその課題が出ればもっとよかったが，教師から出す形になってしまったことは課題であろう。その大きな要因は，資料の読み取りにあると考えている。

資料配付を授業20分前に行うなど，資料の読みとりに関してはもっと丁寧な取り組みが必要だった。言い換えれば，今回の授業の中で将門・純友それぞれ乱を起こすことになった契機を生徒はしっかり理解していなかったのではないかということである。生徒自身の「探究」を重視する授業を求めるためには，その下位の知識はしっかりとおさえなければならない。そして，生徒たちの中に散漫になっている知識をリンクさせなければならないと思われる。この点に関しては，発問の精選や資料の精選が必要であったと考えられる。また，将門・純友2人の年表のようなものがさらに必要であったと考えている。これは，将門・純友についての知識をどのように理解させるかについて悩んだまま授業を行ってしまったところに原因がある。将門・純友の知識については，前時も含め2時間でとらえていくと考えていたが，直前になって，前時の指導過程をかえ，国司と受領の関係を全員がもっている資料集の中にある尾張の国の国司の資料を使ってとらえようとしたために，本時における探究のための知識を与えることができなくなってしまった。また，資料の精選に関しても，将門・純友2人の知識を本時の中でできるだけ与えたいと考えため，量が増えてしまったのである。

このように，王朝国家のとらえ方，探究を重視した授業過程，資料の精選などまだまだ改善すべきところが多い。

3　生徒の評価について

授業における評価は，クラスの全員を対象に必要な活動について説明し，善し悪しの評価をすぐ個人にフィードバックさせ指導してきたつもりではあった。また，時代を学習し終えた後にポートフォリオ（資料２）を作成させ，学習の成果についての評価を行うことができた。

しかし，指導案の中にある「学級全体で」ということに対して評価は個人に対するものであり，全体としてみるものではないという指摘もあり，データとして残す評価（総括的評価）と，その都度生徒にフィードバックする評価（形成的評価）の２つを明確にした取り組みをさらに推進する必要があると感じた。そして，何も指導しないで評価するのではなく，また「評価のための評価」になることなく，「指導と評価の一体化」のあり方についても今後の課題として考えなければならないと考えている。

Ⅵ．おわりに

今回，歴史的分野の授業づくりを通して，「歴史を大きな流れで」「各時代の特色を」を理解させるねらいで行った新しい学習材の開発と，「指導と評価の一体化」をどのように行うかという視点で研究を行ってきた。それぞれにおいて成果はあったが，課題として残されたものも大きなものであった。今後とも研究を重ね，さらによりよい授業の創造をめざしたい。

引用・参考文献

愛媛県歴史文化博物館.「純友と将門ー東西の兵乱」『平成十年度企画展』. 1998.

熊谷篤.「社会科教育実践分析」. 初等教科学習開発演習（社会）資料：改訂. 2003.

黒瀬基郎他.「明日を担う生徒を育てる学校教育の創造(2)」広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育」. 第34集. 2002.

小原友行.「社会科学習の基礎・基本とその指導」. 2002.

五味文彦他.「院政時代」. 朝日百科『日本の歴史』三巻古代から中世へ. 朝日新聞社. 1989.

下向井龍彦.「武士の成長と院政」『日本の歴史07』. 講談社. 2001.

小学館.『日本歴史館』. 1999.

砂田雅志.「社会科における基礎・基本と教材開発」. 広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育」. 第34集. 2002.

田中皓正.『日振島のはなし』三重大学出版会. 2002.

福田豊彦他.「承平・天慶の乱と都」. 朝日百科『日本の歴史』三巻古代から中世へ. 朝日新聞社. 1989.

村井康彦他.「摂関制と藤原道長」. 朝日百科『日本の歴史』三巻古代から中世へ. 朝日新聞社. 1989.

文部省. 中学校学習指導要領解説ー社会科編ー. 1999.

文部省. 第15期中央教育審議会答申. 1996.

資料1　単元のねらい（武士の成長と武家政権の確立1）

単元　武士の成長と武家政権の確立

時　間	単　　元	単　元　の　目　標	関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用能力	知識・理解
	武士の成長と武家政権の確立	貴族の世の中から武士が台頭し武家政権が成立したこととその後の武家社会の展開を武士の誕生、承平・天慶の乱・前九年後三年の役、院政、鎌倉幕府の成立、南北朝の争乱と室町幕府応仁の乱後の社会的な変動を通して理解させるとともに、元寇日民貿易、琉球の国際的な役割など、その間の東アジア世界とのかかわりに気付かせる。農業などの諸産業が発達し、畿内を中心とした都市や農村に自治的な仕組みが生まれたことを理解させるとともに、武士や民衆の活力を背景にして生み出された新たな文化の特色について考えさせる。	武家政権の成立とその後の政治、社会、文化の動きに対する関心を高め、意欲的に追究し、文化遺産を尊重しようとする。	武家政権の成立とその後の政治、社会、文化の動きから課題を見いだし、歴史の流れと時代の特色を多面的・多角的に考察している。	武家政権の成立とその後の政治、社会、文化の動きに関するさまざまな資料を収集し、適切に選択して活用するとともに、追究し考察した結果をまとめたり、説明したりしている。	武家政権の成立とその後の政治、社会、文化の動きを、我が国の歴史とかかわる東アジア世界の歴史を背景に理解し、その知識を身につけている。

時　間	題　　材	目　　標	関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用能力	知識・理解
1時	武士の誕生	健児の制から、唐の脅威がなくなったことを考察し、墾田永年私財の法から私有地がうまれ武士が誕生することを理解させる。	なぜという問いを出そうとしている。	武士が誕生する条件を唐との関係や荘園との関係、国司と軍事との関係から考察している。	防人の歌から農民の心情を読みとっている。資料集から必要な資料を選んでいる。	武士が誕生する過程を理解している。開墾を推進した荘園領主について知る。
2時	平安京と武士の様子	国司の様子考察する中で平安時代前半の様子を理解させる。	国司の生活や武士の成長の様子を知ろうとしている。	摂関政治の始まったころの国司の生活や思いから武士との対立が生まれてきていることを考察している。	藤原元命の資料を読み、国司の悪政について読みとる。	平安時代の国司の様子や武士の成長の様子、蝦夷との関係について理解する。
3時	承平・天慶の乱	平将門・藤原純友が反乱をお個背景を考察し、この乱を鎮圧する中で、王朝国家が生まれてくることを理解させる。	なぜという問いを出そうとしている。背景や結果を積極的に考えようとしている。	将門や純朝の乱の背景や、結果を考察することができる。	純朝に関する資料を読み、純朝の思いをよみとる。恩賞に関する資料を読み、武士の思いを読みとる。	将門・純朝2人の乱が王朝国家の形成に大きな働きをしたことを理解する。

資料２　平安時代のポートフォリオの例

平安時代のまとめ

1年　1組　18番　名前 宮本翔平

794年平安京に都が移る

桓武天皇が都を平安京（京都）に移す。

藤原氏が他の貴族を押しのけてNo.1になる←娘を天皇の妃にする

↓

摂政・関白になって政治を行う。→摂関政治
（良房）（基経）

◦藤原純友の乱（939年～941年）
従5位下（藤原摂関家の親せき）の藤原純友が瀬戸内海で船を使い乱をおこした。※武芸で有名な人

◦平将門の乱（935年～940年）
無位（桓武天皇の子孫）の平将門が関東で他の豪族と対立して、馬を使い乱をおこした。※武芸で有名な人。新皇と名のった。

↓

藤原純友と平将門は、朝廷に自分の存在をアピールしようとしたが、朝廷は不安やこわさから、藤原純友と平将門をやっつけようと、その地方の武士に官位、官職をあげて、二人を攻撃させて、たおしました。

◦このころ武士団の中で天皇の子孫とされる源氏と平氏の率いる勢力が有力だった。
この源氏と平氏の武士を用いて、新しい政治を行ったのが白河天皇だった。
天皇は位をゆずって上皇となったのちも政治を行った→院政
◦やがて院政の実権をめぐる争いから、保元の乱と平治の乱の二つの戦乱がおこった。

◦保元の乱（1156年）
（皇位継承問題
摂関家の争い）

崇徳上皇
藤原頼道（弟）
＋
源為義（親）
負け

VS

後白河天皇
藤原忠通（兄）
＋
源義朝（子）
平氏一門
勝利

↓

後白河天皇の方は、武士の「夜撃ち」という作戦を言ってそれを行ったが崇徳上皇の方は「夜撃ち」はひきょうと言って行わなかったので武士の言う事を聞いて行なった後白河天皇の勝利となった。

↓

武士の力が絶対に必要なもの

◦平治の乱（1159年）
後白河上皇（院政）
藤原通憲（信西）VS藤原信頼
殺す
平清盛 vs 源義朝 → [　　]
院宣
↓
勝利
武士が貴族のトップをやっつける

↓

平清盛が実質政治の実権をにぎる（上皇のもとで）
↓有名な名言
「平氏でなければ人でない」

◦平清盛は太政大臣（貴族のトップ）になる。
◦自分の娘を天皇の妃にする（藤原氏と同じ方法）。
◦中国との貿易の利益に目をつけ、航路を整え、神戸港をつくる。
◦朝廷の政治を思うがままに動かし始めた。

↓

貴族や寺社の反感を招き、地方の武士のなかにも、平氏のやり方に不満をいだく者が増えた。

◦源頼朝は、東国一帯を支配下に入れ、弟の義経を派遣して、壇ノ浦で平氏をほろぼした。
◦頼朝は、国ごとに守護を、荘園や公領ごとに地頭を置いた。　◦藤原氏も攻めほろぼした。
◦1192年に、征夷大将軍に頼朝は任じられて鎌倉幕府を開いて、武家政治を始めた。

1192年　鎌倉幕府成立

※1　重要と考えられる事件、出来事を中心にまとめてみよう！また、その説明もしよう！
※2　原因と結果に注目してまとめよう！